

演じた『山猫軒』の台詞になったので、三人ともどっと笑いこける楽しさ。ミルクのサービスは本当にする事に決めた。(中略)

昭和二十六年山岳同好会が設立され、翌年山岳部が誕生してからまだ歴史も浅いが、天幕二張、リュック二個、シュラフ三個、ロープ一本等、どうにか備品も揃って来ました。又始終、福岡山の会と緊密な連絡をとり、部の発展を計っています。部員は現在三十数名いますが、実際に活動しているのは極く少数です。(中略)登山は他のスポーツと異なり、勝敗を決さないで、人目につきませんが、登山程忍耐と協同の精神を必要とするものはありません。又、山で他の登山者との出会った場合に感ずるあの親しみ、お互いに励まし合うあの心から発する言葉、真の人間性はこの下界ではなかなか見られるものではありません。(中略)戦後、山に登る人が多くなりましたが、中には無駄に木を折ったり、道標にいたずらをしたり、むやみに名前を彫ったりする人がいるのは、実に残念なことだと思えます。吾々は真に山を愛する人を望みます。どうかそういう人が一人でも多く入部され、田川東高校山岳部の立派な伝統を築かれるよう願ってやみません。

※励ましあい苦勞して目的地へ辿り着き食事をする時、最高の至福感に包まれる。

信頼しあった師弟の英彦山の一夜が

目に見えるようだ。

※ 山岳部創設の経過と登山の意義、入部の呼びかけで文は終わる。先生の熱い声が聞こえる。

※ 4号の巻頭は先生撮影の写真「雪路—英彦山—」が飾っている。(写真1)

※ 菁莪5号(昭和31年)には、当時2年生鶴田功氏の「祖母山、傾山登山記」が載っており、6号(32年)には山下先生の夏山報告「市房から霧島へ」、当時2年の武田秀人氏の「椎葉紀行」、当時1年の前田晃稔の冬山報告「九重山」が載っている。

(山下先生、安蘇同窓会長に同行した前田は、この九重登山が縁で今日までの親交を結ぶ)

※ 山岳部記録簿(1953~1956)は東鷹同窓会に寄贈を受けている。(写真2)



(写真1)



(写真2)

定時制文芸誌「文窓」より(その三)

先輩達へ

池永 和弘(一年生)

先輩の皆さん達は色々な

困難を乗り越えて四年間を得て

これからは人に負けない立派な社会人として

巣立って行く先輩の姿を見ていると

僕も何だか 勇気がわいて

これからの 三年間は苦しみも悲しみも

色々な楽しいこともあるだろうが

それらを乗り越えて

今の先輩達に負けられないような社会人となり

この世の為になり

自分の幸せな家庭を作ることが

僕の願いでもあり、また先輩達も

それを望んでいることであろう！

(昭和四十二年発刊「文窓」から)